

# 會 務

第 20 卷 第 4 號 昭和 9 年 4 月

## 役 員 會

### 第 3 回 役員會

開催日 昭和 9 年 3 月 19 日

出席者 會長 久保田敬一君  
 前會長 中川吉造君 那波光雄君 名井九介君 眞田秀吉君  
 副會長 米元晋一君 草間偉君  
 常議員 池邊稻生君 内海清温君 河原直文君 鈴木雅次君  
           那須章彌君 永田民也君  
 常議員兼主計 佐藤利恭君 常議員兼主事 古川淳三君  
 常議員兼編輯長 田中 豐君

#### 協議事項

#### 1. 20 周年記念出版物の刊行並に講演に関する件

記念出版物の刊行並に講演會開催に付き田中編輯長より編輯委員會に於ける成案に依り詳細説明したる後、各部門に就き委員會を設立し實行並に準備工作を進むることとす。

部門及び委員長その他次の如し。

- (イ) 土木學會史編纂委員會 委員長 名井九介君
- (ロ) 土木工學論文集録編纂委員會 委員長 中川吉造君
- (ハ) 記念講演委員會 委員長 那波光雄君
- (ニ) 各委員會の委員選定その他調査内容は委員長に一任すること。

#### 2. 4 月開催講演會に関する件

4 月の講演會を次の通りとし講演者の證銜並に依囑は理事に一任することとす。

(イ) 開催日及び場所 4 月 25 日(水曜日) 帝國鐵道協會

(ロ) 演題並に講演者

高速度寫眞に就て

帝國大學教授 工學博士 栖原 豊太郎君

日食の話

東京天文臺長 理學博士 早乙女 清房君

建築様式に就て

帝國大學教授 工學博士 岸田 日出刀君

輓近に於ける地震の研究

帝國大學教授 理學博士 石本 巳四雄君

但し以上の内 2 者に講演を依頼すること。

(ハ) 講演の時間は討議共各約 40 分程度とすること。

(ニ) 講演終了後有志晚餐會を催すこと。

#### 3. 土木工學著書中にコンクリート示方書轉載の件

本件は前例に依り拒絶すること。

## 4. 會誌發行日變更の件

從來會誌の發行日は毎月 15 日なりしも編輯の都合にて 25 日に變更し爾後これを勵行することゝす。

## 5. 日本工學會補缺評議員選出の件

本會選出の補缺評議員に前會長中川吉造君を推薦す。

## 6. 日本工學會次期評議員選出の件

本會より選出すべき次期評議員は引續き中川吉造君を推薦することゝす。

尙本會選出評議員を 2 名とする工學會への提案は理事に於て立案することゝす。

## 7. 土木學會徽章に關する件

徽章制定に就き圖案研究中の處相當優秀なるものを得たり依てその内 2, 3 種類を試作したる上にて決定することゝす。

## 8. 入退會に關する件

安食安施君外 31 名を會員に青木禮二君外 76 名を准員に荒井茂君外 6 名を學生員として入會を承認し朝枝敏之介外 27 名の准員を會員に轉格承認せり。

而して昭和 9 年 3 月現在の會員數は 3405 名にして 3 月中に於て會員 59 名、准員 49 名、學生員 7 名、計 115 名増加したり。

## 9. 報告その他の件

(イ) 日本工學會臨時評議員會議事を報告し且つ同議事録は會誌に掲載することゝす。

(ロ) 工人俱樂部資格試験に關する件は草間理事より報告す。

(ハ) 會館設立準備委員會の經過を那須委員より報告す。

## 編 輯 委 員 會

### 第 3 回 編輯委員會

開催日 昭和 9 年 3 月 5 日

出席者	編輯長	田 中 豊君					
	委 員	青 木 楠 男君	龜 田 素君	末 森 猛 雄君	中原 壽 一 郎君		
		永 田 年君	野 口 誠君	福 田 武 雄君	星 野 茂 樹君		
		堀 越 一 三君					
	副會長	米 元 晋 一君	草 間 偉君				
	主 事	古 川 淳 三君	主 計 佐 藤 利 恭君				
	書記長	柴 原 龍 兒君					

#### 協議事項

1. 土木學會 20 周年記念事業に關する件
2. 4 月開催の講演會の件
3. 第 20 卷第 2 號所載下記論說報告の討議依頼先を決定す。

道路曲線部の片勾配に關する理論  
走行蒸氣機關車に因る橋桁強制振動の理論

會員 工學博士 久野重一郎著  
會員 工學士 小澤久太郎著

4. 第 20 卷第 2 號所載論說報告、彙報及び參考資料に對しそれぞれ謝禮の階級及び金額を決定す。

5. 第 20 卷 3 號に下記を追加す (事後承認)。

討 議

鐵道線路下暗渠に及ぼす土壓及び列車荷重

著者 准員 工學士 島 田 昇 二

彙 報

永野川改修工事概要

會員 工學士 春 藤 眞 三

釜石港修築工事概要

上 野 節 夫

大船渡港修築工事概要

〃

北陸本線能生・筒石間藤崎附近地之概況

會員 工學士 井 上 隆 根

飛越線猪谷・杉原間第二宮川橋梁の類雪被害

〃 〃 〃

參 考 資 料

コンクリート及び鐵筋コンクリートの可塑性變形

(野 坂 孝 忠)

石灰及びセメントの現場速成試験

( 〃 )

6. 第 20 卷第 4 號に下記を追加す。

論 說 報 告

東京高速鐵道實相の一端

會員 工學士 安 倍 邦 衛

討 議

長波の變形に就て

著者 准員 工學士 本 間 仁

彙 報

久慈港修築工事概要

渡 邊 幸 三 郎 小 田 進

宇島港修築工事概要

會員 坂 本 一 平

水俣港修築工事概要

濱戸川改修工事概要

坪井川改修工事概要

木山川改修工事概要

會員 栴 井 照 藏

特 許 抄 録

壤土及び下層水導入装置、鑿岩機、土地改良法、自動車軌道表面成形装置、淨水装置

參 考 資 料

水力發電所の一様でない運轉が河川の流況に及ぼす影響

(中 野 稔)

層をなす地盤への滲透

( 〃 )

堰體の透水

(本 間 仁)

透過性地層中の水の運動

(伊 藤 剛)

テンター・ゲートの流量係數

(岡 崎 三 吉)

感潮區域に於ける厚い岸壁裏の地下水運動の観測

(伊 藤 剛)

山腹に水平溝を掘つて河水を導き洪水流量を減少せしめる考案

( 〃 )

7. 第 20 卷第 5 號登載論文決定の件

彙 報

加茂川改修工事概要

會員 工學士 三 宅 發 造

白岩川改修工事概要

〃 〃 荒 木 榮 二

萩港修築工事概要

〃 〃 關 谷 新 造

宇部港修築工事概要

〃 〃 〃

8. 抄譯に關する件

## 9. その他決議事項

- (1) 今後討議を寄稿せられたる時はこれを直ちに著者に送附し著者の意見を求めなるべく同時に登載すること。
- (2) 今後討議に対しても内容により場合によつては謝禮を贈呈することあるべきこと。
- (3) 登載後討議に對し編輯長より禮状を贈ること。

---

**維新以前日本土木史編纂委員會**


---

**第 17 回 維新以前日本土木史編纂委員會**

開催日 昭和 9 年 3 月 30 日

出席者 副委員長 眞 田 秀 吉君  
 委 員 江 澤 甚 一君 茂 庭 忠 次 郎君 那 須 章 彌君 板 井 申 生君  
 名 井 九 介君 安 藝 杏 一君 平 井 喜 久 松君 牧 彦 七君  
 那 波 光 雄君 伴 宜君 池 本 泰 兒君  
 囑 託 渡 邊 俊 一君

去る 3 月 13 日附を以て史料未送附の府縣市に對し催促状を發送せしにその回答書の報告並に本月集まりし史料、學會に於ける筆寫狀況照復事項の報告を終り下記事項の決議を見て散會せり。

## 決議事項

1. 歴史地理の目録を購入のこと。
2. 原稿複寫用の用紙を注文すること。

## 配布せし印刷物

議案、注意、参考書類  
 郷土誌に表はれたる全部門に渉る目次  
 内務省圖書課所藏目録  
 農林省所藏圖書目録

---

**20 周年記念會館設立準備委員會**


---

**第 1 回 委員會**

開催日 昭和 9 年 3 月 13 日

出席者 委員長 井 上 秀 二君  
 委 員 近 新 三 郎君 衣 斐 清 香君 那 須 章 彌君 錢 高 作 太 郎君  
 森 井 健 介君  
 副會長 草 間 俤君 主 事 古 川 淳 三君  
 編輯長 田 中 豐君 書記長 柴 原 龍 兒君

## 協議事項

會館候補建物の實地調査並に他會館の設備及び經營方針等を各委員より報告し協議をなせり。

## 第 2 回 委員會

開催日 昭和 9 年 3 月 22 日

出席者 委員長 井上 秀 二君

委員 近 新 三 郎君 衣 斐 清 香君 那 須 章 彌君 錢 高 作 太 郎君  
森 井 健 介君

主 事 古 川 淳 三君 書記長 柴 原 龍 兒君

### 協議事項

他會館の調査報告に基き審議を重ね大體成案を得たるを以て次回迄に具體案を作成協議することとす。

## 20 周年記念土木學會史編纂座談會

開催日 昭和 9 年 3 月 26 日

出席者 名 井 九 介君 那 波 光 雄君 眞 田 秀 吉君 丹 羽 勲 彦君

山口 準 之 助君 笠 井 愛 次 郎君 井 上 秀 二君 草 間 偉君

東 福 寺 正 雄君 北 村 嘉 太 郎君

午後 5 時より土木學會々議室に於て開催し、名井委員長より 20 周年記念事業として記念講演會、祝賀會、記念出版物刊行、會館設立等の計畫あり、依てその 1 部たる土木學會史を編纂するに當り土木學會創立當時の記事を掲載したき目的の下に本日座談會を催したる次第なることを述べ、那波君より土木學會の前身に就き、丹羽君より土木學會を創設するまでの工學會との關係並に土木學會の組織等に就き、笠井君より工學會創設の關係に就き、草間君より土木學會創設に當り工學會へ交渉の顛末等に就きその他の諸君よりも土木學會史編纂資料として有益なる感想を披瀝せられたり、併して本史編纂資料の取纏めを北村、東福寺兩君に依頼することとせり。

## 20 周年記念土木工學論文集錄編纂及び講演會協議會

開催日 昭和 9 年 3 月 28 日

出席者 中 川 吉 造君 那 波 光 雄君 米 元 晋 一君 草 間 偉君

田 中 豐君 三 浦 七 郎君 宮 本 武 之 輔君 萩 原 俊 一君

鈴 木 雅 次君 河 口 協 介君 竹 股 一 郎君 關 信 雄君

古 川 淳 三君 中 原 壽 一 郎君

### 土木工學論文集錄編纂協議會

中川委員長より論文集錄編纂に就き役員會に於て決定したる事項を報告し、田中編輯長より編輯委員會並に役員會に於て協議したる成案に就き詳細に説明をなし下記の通り決定し編纂準備工作を進むることとす。

#### 1. 部門並に主査

第 1 部門 土 木 一 般 (法規災害等を含む) 主査 田 中 豐君

第 2 部門	河 川 (砂防, 灌漑, 運河等を 含む)	主査	宮 本 武 之 輔君
第 3 "	水 力 電 氣	"	萩 原 俊 一君
第 4 "	上 下 水 道 (塵埃處理等を含む)	"	河 口 協 介君
第 5 "	水 理	"	山 口 昇君
第 6 "	港 灣 (干拓其他臨海工事を 含む)	"	鈴 木 雅 次君
第 7 "	道 路 (交通整理等を含む)	"	佐 藤 利 恭君
第 8 "	都 市 計 畫	"	榎 木 寛 之君
第 9 "	材 料	"	藤 井 眞 透君
第 10 "	施 工 (土工, コンクリート基 礎工事等を含む)	"	青 木 楠 男君
第 11 "	應 用 力 學 (土壓風壓等を含む)	"	山 口 昇君
第 12 "	橋梁及び構造物	"	三 浦 七 郎君
第 13 "	鐵 道 (軌道, 索道, 架空索道, 高速鉄道等を含む)	"	竹 股 一 郎君
第 14 "	測 量 (氣象, 寫真測量等を含む)	"	關 信 雄君
第 15 "	堰 堤	"	萩 原 俊 一君
第 16 "	隧 道	"	竹 股 一 郎君
第 17 "	雜 (自動車, 機械器具, 航 空港法規等を含む)	"	田 中 豊君

2. 委員長名にて各部門毎に主査の依頼を爲すこと。
3. 委員は主査に於て選定し次回迄に報告すること。
4. 原稿用紙「カード」を一般會員に送附しアブストラクトの記載を依頼しこれを各部門の主査に於て審査すること。

#### 記念講演協議會

那波委員長より講演會開催に就き協議し次の通り決定せり。

1. 講演は各部門別とし講演時間は討議共約 20 分とすること。
2. 部門及び講演者の數  
河川 2 名, 水力電氣 1 名, 上下水道 2 名, 水理 1 名, 港灣 1 名, 道路 1 名, 都市計畫 1 名, 材料及び施工 2 名, 應用力學 2 名, 橋梁及び構造物 2 名, 鐵道 4 名, 測量 1 名, 土木一般 1 名
3. 講演者は各部門主査に於て選定し次回 (5 月 14 日の豫定) 迄に持寄らるゝこと。

### 工 場 見 學 會

日 時 昭和 9 年 3 月 24 日

參加申込者 193 名

參加者 116 名

見學工場

明治製菓株式会社川崎工場

東京電氣株式會社照明學校及び川崎工場

東京製鋼株式會社川崎工場

午後 1 時明治製菓株式會社川崎工場 4 階大ホールに集合、同工場を參觀見學を終つて一班は東京電氣照明學校及び川崎工場を、一班は東京製鋼川崎工場を參觀見學し午後 5 時散會せり。

## 日 本 工 學 會 記 事

○昭和 9 年 3 月 7 日午後 5 時より日本工業俱樂部に於て日本工學會臨時評議員會を開催し下記の事項を決議され、次で一般會務の報告ありたり。

1. 理事長補缺選舉の件は互選の結果男爵斯波忠三郎君理事長に當選せり。
2. 土木學會より申出に係る故古市男爵記念事業を日本工學會に於て發起の件は理事に於て具體案を作成の上更めて評議員會に附議することに決定せり。

○昭和 9 年 3 月 27 日午後 4 時 30 分より日本工業俱樂部に於て日本工學會評議員會を開催し下記事項を決議され、次で一般會務の報告ありたり。

- (1) 昭和 8 年度日本工學會收支決算及び貸借對照表並に特別會計收支決算の件
- (2) 昭和 9 年度日本工學會收支豫算一部變更の件
- (3) 社員總會に提出すべき事項に關する件
  - (イ) 昭和 8 年度日本工學會事務及び事業報告書
  - (ロ) 同收支決算及び貸借對照表並に特別會計收支決算報告
  - (ハ) 昭和 9 年度日本工學會收支豫算の件

## そ の 他 の 記 事

○昭和 9 年 3 月 5 日付内務省警圖指第 07725 號を以て土木學會誌は每號納本のみを爲しその都度届出の手續省略の件出版法第 10 條に依り許可せらる。

○昭和 9 年 3 月 10 日付にて一般會員に 3 月 24 日開催工場見學の通知をなせり。

○昭和 9 年 3 月 30 日土木學會誌第 20 卷第 3 號發行成規の手續を了し 3 月 31 日これを全會員に配布せり。

○昭和 9 年 3 月 19 日迄に於て下記諸君を入會又は轉格の手續を了し名簿に登録せり。

會 員	近 藤 近	秦 野 重 義	安 倉 安 範	今 野 彦 貞
	百 武 定 一	石 田 誠 一	齋 藤 貫 一	藤 原 讓
	飯 尾 了 二	白 髮 正 人	藤 川 勝 久	岩 永 彌 榮
	杉 村 治 郎 吉	牧 之 瀨 秀 清	打 田 清 隆	田 代 定
	三 宅 秀 太	尾 家 麟 趾	寺 田 甫	柚 木 照 治
	岡 原 亮 三	豐 島 棟 達	與 倉 幸 義	城 戸 鎮 吉
	中 村 熊 雄	米 谷 源 吾	北 原 蝶	萩 原 政 男

准 員

山形賀	小 林 源 次	馬 揚 宗 光	榛 葉 質 耶
青 木 禮 二	櫻 井 新 二	大 井 永 一	青 木 誠 一
澤 田 一 次	磯 谷 鐵 磨	淺 入 正 三	澤 川 上 田 清 信
金 板 野 宮 梯 彦	磯 沙 見 下 美 代 治	坂 喜 多 山 潤 次 郎	川 岩 浦 善 次 郎
四 野 弘 喜 幹 郎	伊 藤 田 眞 一 豐 雄 夫 三 郎	岩 上 幸 朝 憲 三 章 仁 朗 覺 志 三 郎	川 井 上 治 藤 本 田 新 利 太 恆 賢 太 貞 一
黑 川 揚 中 四 太 郎	後 藤 原 重 信 修 四 郎	近 藤 上 橋 源 恒 隆 道 次 俊 慎 仁	井 丹 佐 藤 本 田 新 利 太 恆 賢 太 貞 一
揖 田 佐 藤 井 利 太 郎	石 長 坂 上 内 嘉 松 星 賢 茂 次 郎	井 高 佐 内 淵 渡 中 松 波 望 安 柳	井 丹 佐 藤 本 田 新 利 太 恆 賢 太 貞 一
石 井 先 清 太 郎	坂 鳥 堀 若 永 宮 丹 服 樋 青 島 健 雄 助	渡 部 村 永 邊 月 村 原	井 丹 佐 藤 本 田 新 利 太 恆 賢 太 貞 一
酒 富 岡 下 川 幸 政 富 健 辰 武 荒 井 道 彦	若 永 宮 丹 服 樋 青 島 健 雄 助	中 松 波 望 安 柳	井 丹 佐 藤 本 田 新 利 太 恆 賢 太 貞 一
松 吉 永 光 森 山 吉 荒 宮	若 永 宮 丹 服 樋 青 島 健 雄 助	望 安 柳	井 丹 佐 藤 本 田 新 利 太 恆 賢 太 貞 一

學 生 員

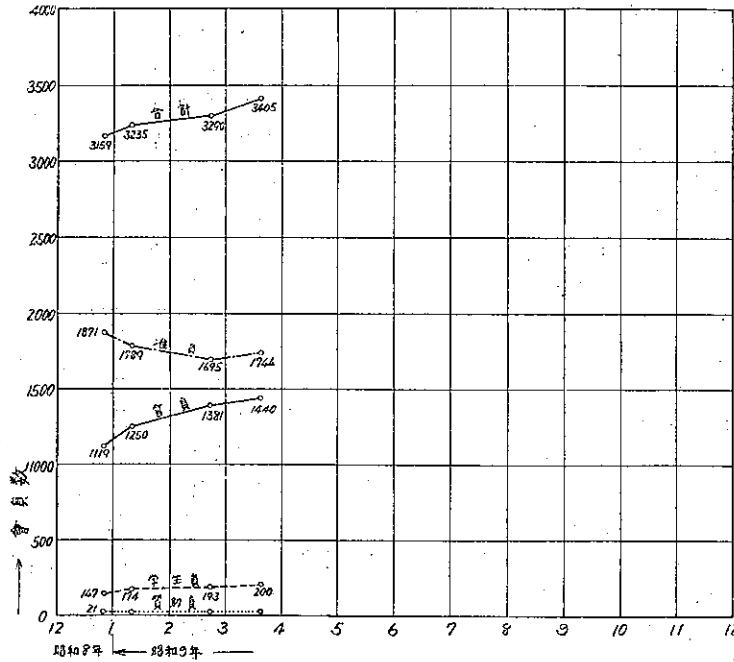
准員より會員に轉格したるもの

會 員

朝 枝 敏 之	澤 勝 藏	西 松 醇 厚	阿 部 貞 壽
皿 井 力 三 三 保 竹	藤 野 嘉 一 誠 榮 茂 重 造	伊 藤 原 島 邊 内 時 太 郎	重 松 井 須 賀 田 誠 三
堀 山 橋 定 上 原	板 倉 松 下 波 田 正	菅 松 川 武 辻	大 岡 山 長



昭和9年1月以降會員移動一覽圖表



昭和9年3月中に於て寄贈又は交換を受けたる雑誌其の他下記の如し。

- |                                |                  |
|--------------------------------|------------------|
| 東京土木建築業組合報 第7巻第2號              | 東京土木建築業組合        |
| 衛生工業協會誌 第8巻第2號                 | 衛生工業協會           |
| 工學院同窓會誌 第36巻第3號                | 工學院同窓會           |
| セメント工業 3月號                     | セメント工業社          |
| 造船協會雜纂 第143號                   | 造船協會             |
| 港 灣 第12巻3號                     | 港灣協會             |
| セメント・コンクリート道路 No. 20 (聖天坂試験鋪裝) | 日本ポルトランド・セメント同業會 |
| 鑄 物 第6巻3號                      | 日本鑄物協會           |
| 土木建築雜誌 第13巻3號                  | シビル社             |
| 工事畫報 3月號                       | 工事畫報社            |
| 工學彙報                           | 九州帝大工學部          |
| 都市問題 第19巻3號                    | 東京市政調査會          |
| 工業化學雜誌 第37編第3冊                 | 工業化學會            |
| 同 上 歐文綴                        | 同 上              |
| 鐵道技術 第8巻第3月號                   | 鐵道技術社            |
| Engineer (寒中コンクリートの研究)         | 都市工學社            |
| セメント界彙報 第312號2冊                | 日本ポルトランド・セメント同業會 |
| 動 力 2月號                        | 日本動力協會           |
| 建築と社會 3月號                      | 日本建築協會           |
| 上越線水上石打間工事誌 第1,2巻5冊            | 鐵道省              |
| 山小屋建築                          | 建築學會             |

尾張大橋工事概要	愛知縣廳
電氣學會雜誌 3月號	電氣學會
工 學 No. 235	東京工學社
國立公園山小屋號 第6卷3號	國立公園協會
鐵と鋼 第20年第2號	日本鐵鋼協會
工業現勢 第3卷第3號	東京工業大學
帝國學士院紀事 第10卷第2號	帝國學士院
工 政 第167號	工 政 會
日本建築士 第4卷第2號	日本建築士會
機械學會誌 第37卷第203號	機械學會
Excavating No. 2	三井物產會社機械部
會務彙報 第28號	日本土木建築請負業者聯合會
鋼索運輸	東京製鋼株式會社
G. S. news 3月號	日本電池株式會社
建築雜誌 第48輯第582號	建築學會
工學報告 第11卷第2號	東北帝大
三菱電機 第10卷第2號	三菱電機株式會社
早期高強度ポルトランド・セメント規格案に關する回答綜合表	} 日本ポルトランド・セメント同業會
混凝土骨材試驗節に關する調査	
地震研究所彙報 第12卷第1冊	東京帝大地震研究所
機械工學便覽	機械學會
水曜會誌 第8卷第4號	京都市大水曜會
日立評論 第17卷第3號	日立評論社
土灰及地盤の支持力 第2卷	コロナ社
下水道及汚水處理法 //	〃
工 人 3月號	日本工人俱樂部
業務研究資料 第22卷第4,5,6號	鐵道大臣官房研究所
會 報 第35卷第3號	帝國鐵道協會
水 道 第9卷第3號	橫濱市水道局
東京工業大學々報 第3卷第3號	東京工業大學
旅順工科大学報告 第2卷	旅順工科大学
工業化學雜誌 第37號第4冊	工業化學會
工學院同窓會誌 第36卷第4號	工學院同窓會
沖電氣時報 Vol. 1. No. 2.	沖電氣株式會社

# 會 報

第 20 卷 第 4 號 昭和 9 年 4 月

## 役 員 會

第 3 回役員會は第 3 月曜なる 3 月 19 日を以て本學會々議室に於て開催された。同日出席された役員顔ぶれ及び議案の要は別記の如くであるが、前會長 4 氏揃つて出席せられ役員諸氏と膝を交へて各種の計畫に、審議に、大に意見を開陳せられたる新役員會議にふさはしい心強いものが感ぜられた。以下順次議案の各項について審議決定に至つた模様の大略を紹介しよう。

### 1. 20 周年記念出版物の刊行並に講演に關する件

20 周年記念事業の一として出版物を刊行せんとする計畫は發案以來早くも大なる期待をかけらるゝに至り、それだけに實行方針に關しては理事會編輯委員會等に於ても種々協議が行はれて居つたが先頃編輯委員會に於て別項の如き成案を得たのでこれに關して田中編輯長より詳細なる説明を加へられ併せて役員會審議の參考迄に種々なる腹案をも述べられた。

(イ) **土木學會史の編纂** 學會も創立以來 20 年を迎ふるに至つたが齡を重ねると共にその創立に至れる趣旨、當時の状況は、これに關係しその間の事情を知る人も少くなるに従つて次第に不明となるは又已むを得ない事であらう。そこで學會の歴史を編纂しこれを將來に残しをくは極めて有意義にして又必要な事柄なるは何人とも雖も異論のない處であらうが唯これをなすに適當の時機を得ることが問題であつた。然るに本年は恰も創立 20 周年に當りその記念事業としてこれを企てんとする事は眞に時宜を得たりと云ふべく、一同異議なくこの編纂に着手することになつた。而して短期間に然も編纂の完璧を期せんが爲には相當の組織を必要とするを以て土木學會史編纂委員會を設立してこれが遂行に當らしむることとし前會長名井九介氏を委員長に推し追つて各委員決定の上早速實行に着手することになつた。

(ロ) **土木工學論文集録の編纂** エンヂニアリング・インデックス様のものを作らんとする計畫で工學全體としての論文要録は既に工學會に於て出版されてゐるが、土木プロパーのものは未だ作られてゐない。この種の論文集の必要なることは昨年の學會振興委員會の建議案中にも含まれてゐた如く今更喋々を要せぬ處であるが論文集録なる性質上、土木工學工事の凡ての範圍に互り又地域の至る所に及んで總てを網羅する事を要するためこれ又簡単に着手することが出來ず今日迄その必要は認められ乍らも實現するには至らなかつた。従つて今回の記念事業の一として實行せんとするは極めて適切なりと云ふべく、寧ろかゝる大事業を果して能く今秋の記念祝賀會當日までに纏め得るか否かと問題であつたが、方法に依つては充分間に合はせ得る成算を得たので直ちにこれが編纂委員會を組織して早速準備に着手することとし委員長には前會長中川吉造氏を滿場一致を以て推薦した。従つて具體的實行方法は委員の選定、委員會の設立を待つて早晩確定さるゝことであらうが編輯委員會の案としては編纂委員會に於て土木工學、工事等を道路、港灣、鐵道……等の専門別に分ちて各主査を決定し、更に理論、實驗、調査、設計、工事等の種別を作りて夫々文獻を集めその著者にカード式にせる記入用紙を送りこれに論文の内容梗概を 500 字程度に記載する様に依頼し又必要に應じては圖面並びに寫眞等も含め夫々部門主査の審査を経て登載を決定せんとするもので蒐集の範圍は大正、昭和を主とし顯著なるものは明治時代に於けるものをも包含することとし學會誌は勿論、報告書、雜誌、パンフレットその他凡ての刊行物に互つて調査しこれを網羅すること、但し餘りに

厖大なるものとなる恐ある場合には工事等に於ては工事費に制限を附する等適當なる採擇標準を作ることも必要であらう。何れにしても今夏一杯には纏めねばならず時日に充分の餘裕ありとは思はれぬので直ちに準備を進むることに決定を見た。

(ハ) 記念講演會 2) 周年記念祝賀會の當日講演會を行はんとするものでこれ又有意義なることは論なくこれが準備のため記念講演會委員會を組織することとし、前會長那波光雄氏を推して委員長を煩はすことに決定を見た。尙記念講演會の腹案としては次の如きものが考へられてゐる。日程は第 1 日は祝賀會を行ふ事とし、第 2 日及び第 3 日の午前中を講演に充て午後を視察見學會を行ふ豫定。而して講演は論文集録の専門部門別として各部門に 1 人又は 2 人を選定し 1 人の所要時間は質疑應答を含みて約 20 分位とすること等。

尙以上の 3 委員會に對して今役員會に於ては唯委員長を決定したのみにて各委員の選定は委員長に一任することに決定した。

#### 2. 4 月開催講演會の件

4 月中に開催豫定なる講演會の演題及び講演者は大體別記の内より 2 を選擇し依頼する豫定なるも何れも斯界の權威者にして而も演題は興味深き問題なるを以て成るべく 5 月、6 月と連續して總てを聴講し得る様にしたしと希望せらるゝ方もあり、結局 4 月に於ける講演の選擇その他理事會に於て善處せらるゝ様一任することに決定す。

#### 3. 土木學會編纂コンクリート示方書轉載の件

本會のコンクリート示方書に關し發行以來その轉載方を依頼し來れる事は再三あつたが從來は拒絶して居つた。これは一見コンクリート技術の普及を妨ぐるとの非難? を生ずる如く見ゆるも實はこれに依る収入は更に各種の調査研究の有力なる財源として活用し居る實狀にしてこれを棄つるは却つて他の研究を妨ぐる嫌あるを以て尙將來に於ても當分は如上の申出は拒否する事に決定したのである。

#### 4. 會誌發行日變更の件

從來會誌發行日は毎月 15 日を以て規定せるも、編輯委員會が毎月第 2 又は第 3 月曜日に開催せられ而も緊急を要するものは同月の會誌に登載する様にして居つた爲實際發行に至るは概ね 20 日以後であつた。事實編輯委員會開催日と會誌發行日とが餘り接近するは編輯事務上不便多きを以て今般編輯委員會を毎月第 1 月曜日に開催する事すると同時に會誌發行日を 10 日繰下げ毎月委員會に於て決定せる緊急記事は直に同月の會誌に間に合せ以てニュース報導上遺憾なからしめんことを期せるもので、發行日を繰下げたる爲め實際發行日が更に遅延する様な事は先づないつもりである。

#### 5. 及 6. 日本工學會に關する件

日本工學會に對する本會よりの代表評議員は本會名譽會員たりし古市公威氏が選出せられ、理事長の要職に居られたのであつたが先般逝去された結果、本會の代表を補選することとなり中川吉造氏を推すことに一致を見た。尙工學會へ各學會より選出されてゐる評議員は各 1 名に限られてゐるため、本學會等では從來工學會との連絡上不相合なる點が少くなかつた。依つて工學會に對して各 2 名位の評議員を選出し得る様制度變更方を建議し以て各學會と日本工學會との關係を一層緊密ならしむる様はかる事に決し、その具體的方法は理事會に於て協議の上決定することとなつた。

#### 7. 土木學會徽章制定の件

土木學會員たるの名譽と誇りとを表徴すべき徽章を制定するため先般來既に徽章を有する各學會協會等の徽章を蒐集調査しその構圖及び徽章品質等に就き研究を重ねをり又會員森井健介君に依頼して特に圖案のデザイン

を乞ひたる處數種考案の上今夕特に持參せられたるを以て、氏の列席を乞ひ種々説明と批評とを聴きたる結果、最も多數の賛同を得たる 2 種に就て實物見本を作製し再び審査をなすことに決定す。

8. 9. に関しては例月の如くにして別段報告すべきものもなかつた。

かくして今日の議案を終り一同歡談裡に食事を共にして 9 時散會したのである。

## 編 輯 委 員 會

第 3 回編輯委員會を 3 月 5 日日本學會々議室で開いた。今回は編輯長以下 7 名の委員が第 2 回役員會に於て新任せられたので全員出席せられ新しい氣分が横溢してゐた。昨年に於ける本委員會の活躍は既に報告した通り目醒しいものがあつたが、本年は本會 20 周年記念事業及び振興の途上にある多事多難の秋、新委員に期待する所大なるものがあるのであるが、その顔振れによつて我々は更に意を強くすることが出来たのである。我々は本委員會の大飛躍を期して俟つべきであらう。

開會に先立ち先づ米元副會長より「新定款により常議員の田中君が編輯長となり又新たに 7 名の委員が新任せられたに就て會長に代り皆様に本會の爲に御盡力を願ふ次第である。又本會は昨年より振興の事に就て種々計畫せられて居り又會誌も色々改善せられニュース・ヴァリューに富ませる様になつて來たのと本年は丁度本會創立 20 周年に相當するので色々な記念事業をやる計畫であるから一層諸君の盡力を願ふ次第である。」との意を述べられ、續いて草間副會長より「唯今米元副會長よりも御話があつたが我土木學會の隆昌に就て私は前編輯長として色々盡力した積りであるが豫期通りうまくゆかなかつた事を遺憾とする。昨年中會誌の編輯に就ては紙質を換へ、活字を小にした事、特許抄録欄を新設した事等である。又論說報告が難解に過ぐとの批判もあり電車中でも讀み得る簡單なものゝ欄を設け度いと思つたがうまくゆかなかつた。地方會員に對しては會誌が唯一のものであるから會誌の威嚴を保ちながらポピュラーにしニュース・ヴァリューに富ませることが必要であらう。振興委員會の結果から色々な事業も出来ることゝ思ふが宜しく諸君の御努力を願ふ。」との挨拶があり、これに續いて田中新編輯長の挨拶があつた。

即ち、「昨年定款の改正により常議員が編輯長を兼ねることになり、以前委員として關係してゐた爲か私がこの度編輯長の職を汚すことになりました。私はその器にあらざるかと考へたのでありますが幸ひ草間前編輯長も副會長として残られ又舊委員の方も居らるゝので諸君の御助力により任を全うしたいと思ひます。先日第 2 回役員會に於て 20 周年記念事業として記念講演會、記念出版物の刊行等の案がありその調査研究を私が御引受けしましたがこの委員會で御協議を願ひ度いのであります。又學會を眞に會員の學會と言ふ氣分になる様に學術講演會、視察旅行、見學會、通俗講演會等を催し親しみのある學會としたいと思ふ、この點に就ては古川主事よりも御話しあることゝ思ひます。20 周年記念事業の 1 としての出版物に就ては色々な案があるが一案として土木學會の歴史と今日迄發表せられた各論文のアブストラクトを作ることは最も有意義ではないかと思ひます、これに就て今日特に色々御相談したいのであります。その編纂方法、蒐集の範圍等の問題に就て又記念講演會に就ては私は一人の時間を出来るだけ短くして數多くした方が宜しいと思ひますが色々諸君の御意見を承はり度いのであります。今後共皆様の御盡力を一重にお願ひする次第であります。」

續いて自己紹介あり、佐藤主計からは會の収入の増加をはかると同時に合理的支出は決して厭はないから本會の

發展の爲に盡力を乞ふとの意を述べられる。古川主事よりも編輯委員諸君の盡力により本會の發展を希ふ意を述べられた。次いで議事に入ったのである。

1. 土木學會20周年記念事業に関する件 田中編輯長より委曲説明あり各員の意見を求め種々協議の結果大體次の様な意見があつた。

(1) 記念出版物

- (イ) 土木學會史を刊行すること。
- (ロ) 本邦土木工學論文集録の如きものを刊行すること。
- (ハ) 大正、昭和時代のものを主とすること、但し明治年代のものも出來得れば集録すること。
- (ニ) その方法として先づ部門別に文獻を集め著者にカードを送りこれに論文の内容梗概を記載することを依頼しこれによつて集録を編纂すること。
- (ホ) 朝鮮、臺灣、滿鐵、樺太をも包含すること。

(2) 記念講演會

- (イ) 日程： 第1日祝賀會、第2日、第3日講演會及び見學。
- (ロ) 講演會及び見學は午前講演會、午後見學とす。
- (ハ) 講演會は部門別として1人20分間(討議共)とす。
- (ニ) 講演は全部一室にてなすこと。
- (ホ) 各部門の講演數を次の如くす。

河	川 (2),	水 力 電 氣 (1),	上 下 水 道 (2)
水	理 (1),	港 灣 (1),	道 路 (1)
都 市 計 畫 (1),	材 料 及 び 施 工 (2),	應 用 力 學 (2)	
鐵 道 (4),	橋 梁 及 び 構 造 物 (2),	測 量 (1)	

計 20

(3) 記念出版物及び講演會に関しては別に委員長を推戴してその事業の遂行を計ること。

2. 4月開催の講演會の件 第2回役員會にて決定せる4月開催の講演會に就て古川主事より各委員の意見を求め種々協議の結果大體次の様な意見があつた。

- (1) 講演者は2名乃至3名を可とす。
- (2) 講演は土木専門のもののみならず興味多き各種のもの(テレビジョン、建築様式等)に亙つて選定すること。
- (3) 講演會の通知狀をその都度全會員に發することは不便多きを以て今後會誌を以て豫告すること。
- (4) 但し最初の講演會(4月開催)は特に葉書を以て通知し今後は會誌にて豫告する旨會員に知らしむること。

議案 3. 4. 5. 6. 7. に関しては別に特記することなし。

8. 抄譯に関する件 本件に関しては相當の意見もあつた様であるが今回は議題が多く時間も迫つたので次回に於て審議することとした。

9. その他協議事項

(1) 従來討議を寄稿せられた時は先づこれを會誌に登載しこれに對する著者の回答は暫らくしてから登載せらるゝこととなるので興味を殺がることが大であるから、出來得れば討議と著者の回答とを同時に登載するを可とすとの意見が多かつた。今後は討議の寄稿があれば直ちにこれを著者に送付しその意見を求め、なるべく同時に登載することに決定した。

(2) 従来討議に對しては謝禮を贈呈しなかつたが討議の中でも立派な論說報告に匹敵するものがあるから内容によつては謝禮を贈呈すべきであるとの意見あり一同賛意を表したるを以て、今後内容によつては謝禮を贈呈することを得、と言ふことにしたのである。

(3) 討議に對しては登載後著者に禮狀を送り敬意を表すべきであるとの意見あり今後は編輯長より登載後禮狀を贈ることに決したのである。

### 維新以前日本土木史編纂委員會

橋なくて日暮れんとする春の水古河の流を引つ種おろし(蕪村)いつの間にか風も春らしくなりたり。

吾が維新以前日本土木史編纂事業も追々に進行し、其の原稿も或部門に於ては既に脱稿の域に達するものあるに至れり、併しながら全部揃ふに於ては未だ短日月にはこれを期待し得可からざるが如しと雖も豫期に反し速かに進みつゝあるは喜ぶ可きことなり。

今回の編纂に當り治水の部に於てひそかに期待せしは京都府下維新以前民政資料選抜目録並解題(史料編纂所所藏)中の嘉永年間加茂川改修圖渡船舊例の覺文化5年御普請仕様帳木津川治水取調書の如き又長野縣下上高井古文書目録中の寛政12年河原御普請關係寛保成年滿水に關する地圖弘化滿水後土堤築直地圖等の如き町村役場とは限らざるも多くは町村役場に所藏さるゝ川に關する古記録の如き各地方地方に於ける特殊の工法の記録なりとす、而し編纂當初に於て史料の蒐集に當り土木一般の梗概のみにて宜敷との御依頼狀を發送せし以上は上述の如き古記録の省略さるゝは當然にして又再びかゝる古記録の蒐集さるべき好機會を得べしとも思はれざる今日に於ては甚だ遺憾なることなり。京都府よりは3回或は4回に涉りて史料の御送附を煩はしたることながら最近に於て送附されし木津川御留の記録の如きは右に述べしが如き川に關する古記録の一ともいふ可く貴重なる參考たるべし。

御援接による各府縣市よりの史料は言ふに及ばず特に京都府、熊本縣、静岡縣等の如きは或は特に文科の専門家を聘せられ慎重なる調査を遂げられしは感謝に堪へず。由來我國は模倣に巧みなりと言はるこの治水の部に於ても昔時或は當時の先進國たる支那に朝鮮に學びたる可しと雖も模倣し學び而して且つ一步を進め眞田前會長の言の如く日本獨特のものにして今日尙且つその工法を踏襲するといふ技術を生み出したるは江戸時代にして所謂我土木史上一畫期的時代を生じ即ち始めて日本精神的なるものゝ出顯を見たるはこの時代のことなりとす、願みて維新以後師を泰西に求めたる我は今日果して一步を進むるの域に到達せしや否やはにはかに斷言し能はざるところなりと雖も必ずや往時に於ける江戸時代的なるものゝ出顯を見その一步を進むるの域に追進することは當然のことにして然かせしめざる可からざる可きを信ず。

土木史編纂委員會は毎月開催し其都度順なる進行を見つゝあり男爵山内陸軍中將閣下は昨年滿洲國顧問となられたるを以て1,2回委員會に御出席ありしもそれ以後は代理として陸軍省技師久野直氏をつかはされ毎回氏の御出席を煩はしつゝあり、又先の農林省耕地課長たりし有働良夫農學博士は農林省を退官せられし後某組合の理事長に御就任御多忙の爲板井農林省技師を代理として毎回氏の御出席を煩はしつゝあり。

先般の學會職制變更に伴ひこれ迄の平井、牧野兩氏の土木史編纂委員會幹事は委員に、新任主事の古川氏を土木史編纂委員會の幹事にそれぞれ御依頼することゝなれり。

今回集まりし史料を通覧するに参考となるべきものを圖書館に就て調ぶるに下記の如きものありたり、我國に於て維新前の治水の工法に就ては曩に眞田前會長の著“水利工論”中に参考書の掲記を見るが故に夫等はこゝに省略せり。第1部門即ち河川堤防運河及び砂防に於て

荒川綾瀬川中川中郷御普請御仕用帳の寫、  
倭風俗墨堤の花 周延畫 3枚、  
押上堤 春潮畫、  
隅田堤の夕景 廣重、  
眞乳山山谷堀三圍堤 廣重、  
加茂川浚土砂運送略圖、  
安政3年嘉永5年江戸川通村々種類普請出來形仕様  
水門の圖、  
大川通出水の一件、  
本所壑川大浚書留、  
日本橋壑川小名木川等川浚、  
文政11年三十間堀浚、  
享保より寛政埋樋水門、  
壑川浚、  
川普請國役金、  
園置物天保弘化嘉永文化、  
辻番水防享保安永 (以上は舊幕府時代の書籍にして東京府より上野圖書館へ貸渡のものにして元東京府藤田  
技師よりの目錄よる)

利根川治水考 根岸門造、  
大阪木津川口の圖、  
畿内治河記、  
江戸近郷出水の圖、  
荒川通技川繪圖、  
關東川々繪圖、  
安治川廻船目印山地所細見圖、  
宇治川沿革圖、  
治河要録八卷、  
山城木津新川敷濱地古川床開拓地分間繪圖、  
掘割川浚々開濶並石垣の圖プラントン (以上内閣文庫)  
西山大川符合川諸入用帳 天保13年、  
寛保山田洪水記 文久3年  
普請方別秘録 土木自在、  
江州勢田川洲浚國普請仕法圖繪 (早稻田大學圖書館)、  
川普請に關する秘書、  
吹塵録、  
甲州川普請御用中日記、  
諸普請に關する覺書、

川普請取調書  
東京兩國百本杭曉の圖 清親畫  
隅田堤櫻狩の圖 國貞  
隅田堤 昇齊  
荒川御普請仕用帳  
安政3年加茂川御浚の圖  
天明6年水害救護誌  
諸領邑々覺帳 (以上日比谷圖書館)  
享保より天保の川浚  
川筋浚書留  
嘉永元年より慶應元年川筋定浚  
享保より弘化出水  
深川筋川々浚書留  
巴波川筋圖  
入用享保  
底切

利根治水論考 吉田東伍  
巴川治水沿革誌  
論筑後川水害  
大津熊野川より京都白川橋伏見六地藏通船堀割見積  
神田川通繪圖  
關東川々内郷繪圖  
勢田川圖  
五畿内川筋圖 (以上上野帝國圖書館)  
土木普要錄  
加茂川浚風聞書類  
野後村水損所惣人夫見積帳 安政  
土木普請集 舊幕府普請方吏員用表  
五十ヶ年普請明細帳 (以上神宮文庫)  
土木控帳  
川々普請諸式直段  
甲州川々普請諸式の直段  
史學第八卷郷土史誌目錄 國分剛二氏

(以上慶應義塾圖書館)

尙次の書籍は上野帝國圖書館所蔵のものにして今回土木史編纂に就き寫眞撮影のため同館に於て提示されしものにして全部門に渉るものなり。



地方測量圖、  
町見辨疑、  
伊能忠敬先生量地傳習錄、  
普請積書、  
宮川家土木普請要集、  
百橋一覽圖、  
上水記、  
御普請目論見手控、  
扶桑城圖記、  
兩國橋掛直御修復出來形繪圖、  
御本丸天主臺正面圖、  
匠家故實錄、  
繪本土農工商、  
岷江畫帖、  
大日本船路細見圖、  
河筋水除便覽、  
御普請定法、  
渾發術要法、  
御普請定法、  
御普請手引集、  
堤防溝洫法、

川除樋橋圖  
水納記  
河筋水除便覽  
治水資料よしあし草  
堤防圖彙  
川除用水  
石垣秘傳  
治水錄  
繪本庭訓往來  
衣食住諸職繪解綿畫  
修造廣記  
算法地方大成  
土工秘錄  
春日權現靈驗記  
算法普請手引集  
深川元木橋掛替御普請繪圖面  
疏導要書  
御普請一件  
耕稼春秋上下  
成形圖説  
普請目論見鑑 (以上)

又大阪市よりの添附越の目録中には

大阪府淀川左岸水害豫防組合誌、  
大阪古圖、  
大阪府下探訪古文書目録、  
中世に於ける淀川河口の發達、  
近畿川筋繪圖、  
舊大和川河道用水路樋門圖 (以上郷土誌等を除く)  
六十五大川流域誌、  
日本災異誌、  
利根川流域資料、  
地方諮詢屆書、  
内洋經緯記、  
繩張の圖式、  
吹塵錄餘録、  
川除御普請積方法、  
全國水害録、  
武藏下總洪水略、  
備前渠の圖、  
淀川筋の圖 (以上帝國大學圖書館)  
水經 漢魏叢書第七十九冊二卷、  
外支那治水書 47 書名あり (略)

淀川流域圖  
近畿土砂留川小繪圖  
大阪兩川口並最寄海岸諸家園場所繪圖  
大和川治水者層從五位中某兵衛略傳  
玉串川流域論所立會圖

六十五大川工費録  
利根川流域治水沿革誌  
荒川流域治水沿革誌  
關東筋川々御普請御留  
舊幕普請方當用便覽 (以上市史編纂所)  
繩法  
御冥加普請の記并圖  
御普請所仕來帳  
信州山簷川塞治水の圖  
大和川堤地所に付水冠村町繪圖  
淀川筋國役堤支配分の圖

水經註 40 卷

その他諸書中に散見せしものを列記せば

伊澤彌惣兵衛日記、  
兼山先生傳、  
大阪川口及淀川大浸瀨記并圖、  
元祿 14 年天明 9 年伊佐津川洪水留、  
北上川沿革調、  
諸國川々凡水源流末留、  
本朝河功紀略、  
川越大洪水、  
利根川沿革考 河田氏、  
治水考 船橋氏、  
御普請方村場御普請所繪圖、  
川筋竹木置場冥加金上納請書、  
攝河州水損村々改正繪圖、  
隅田川兩岸一覽、  
勝國治水遺、  
高瀬川筋の圖、  
利根川筋船貫極、  
地名河川通用考、  
天明丙午江都大水天保川流、  
京洛大火洪水、  
享保 20 年卯年洪水の記  
雲州大洪水破損所書附寫 元祿 15 年、  
箱根山湖水新川木瀬川通川普請所地震荒、  
函湖疏水誓書本書、  
下利根川開通御用留 大竹角兵衛、  
下野國南部治水實測圖、  
豊饒河道策 寛政 12 年、  
治水積方必携 山崎藤左衛門、  
大和川堀割大依羅池ノ圖、  
肥前筑後川論記録 十川外記、  
御普請定法の事川除普請一件山梨縣千場村嘉永

近江國水害一覽表  
了介先生事蹟  
雲州大洪水破損所書付寫  
利根川兩岸明細圖  
川通御用中日記  
通川普請所地震荒大破國訴内目論見帳  
利根川分水堀割見込書  
出水の節取計方手續  
隅田川考 中神氏  
犀川沿革圖繪  
甲州傳水利法  
大阪川口さらへ  
本所南割下水横川通繪圖寫  
淀川兩岸一覽  
安政 3 年江都大嵐出水場所明細圖  
雄横石川水論調停書  
大水記事記  
續祖聽草  
大水歌日記  
建保 5 年古文書 河村瑞軒記  
利根川圖誌四冊 附普請雜形繪圖共並附錄定法  
各地水害圖繪  
京都伏見間水路地圖  
水門堀下願書の寫  
洪水考 曾根仙右衛門  
室見川口圖  
池川通普請所地圖 代官鹽谷大四郎  
河川調査書 土木監督署  
公用土木材料留書 柳川政昌控享保  
水理麵御普請出來形帳寫寛政 8 年文化 9 年  
元祿元年より元文 2 年まで 50 歳御普請明細帳寛保  
(以下次號 9, 3, 30)

## 20 周年記念土木工學論文集録編纂及び講演會、協議會

3 月 28 日 20 周年記念土木工學論文集録編纂及び講演會に關する協議會を開いた。第 3 回役員會に於て土木學會 20 周年記念事業の 1 として土木工學論文集録編纂並に講演會開催の具體的方針が決定したのでその實行準備として協議會を開いた。先づ土木工學論文集録編纂に關して中川委員長より「先日土木學會役員會に於て 20 周年記念事業として土木學會史、土木工學論文集録、講演會等を催すことになりまして私が土木工學論文集録の方に委員長として關係することになったのでこの事に就て御相談し度いと思ふのであります。從來土木關係の論文が多數ありますがこれ等のアブストラクトを作ることは最も有意義で時宜に適したことであると言ふことになり、

別紙の通り（別紙は役員會記事参照）の要領によつてこの事業を遂行することに致したいと思ふのであります。これに對しその経過を田中豊君に説明して頂くこととします。」との意を述べ次いで田中豊君より次の様な説明があつた。即ち

今日皆様にお集まり願つたのは會長より御願ひしたのでありますから會長より御話致すべきであります。但し委員長より御指命がありましたので借越ながら私から経過の概略を申し上げます。20周年記念事業として記念出版物の刊行及び講演會の開催に就て第2回役員會で私に準備せよとの御命令を受けましたが私は微力でありますので先般の編輯委員會で色々協議を致しました所アブストラクトを作ることが最もよいと云ふ案を得まして役員會に提出した結果中川博士に委員長を御願ひすることになつたのであります。論文集録を作ると致しましてどんなものがいゝかと申しますと只今中川博士がお持ちになりました工學會の論文要録の様なものがよくはないかと思ふのであります。これを作る目的は土木學會誌の第1巻第1號から今日迄どんな内容の論文があるか又その他の雑誌に發表せられたものにはどんなものがあるかを知ることにあるのであります。これは現會員は勿論今後入會する方々にも大變有益のことと思はれるのであります。その方法として先づ全會員に原稿用紙を数枚宛送り本人の發表せられたものゝ梗概を書いて貰ふこととすれば比較的好都合に集まると思ふ、これを集めて第1版を作ることが出来ると思ひます。第1版に洩れたものがあればおもむろに改訂して補充して宜しいと思ひます。

それで第1版だけは記念祝賀會迄に是非とも刊行したいと言ふ譯でありますから僅かの委員でこれを完成することは殆んど不可能であります、それで全會員にカードを送つて願ひすることとせば少くとも自分の發表したものは書いて下さると思ふのであります。次に蒐集の範圍でありますが初め大正、昭和に限るか明治時代も入れるかと言ふ議論がありましたが著名のものは入れることとなつたのであります。それで著者から送つて來た原稿はこれを審議せねばなりません。以上

これより協議に入り色々意見も出たのであるが結局部門及び主査を別項の通り決定したのである。主査の下に補助として数名の委員が必要であるがこれは各主査に於て選定の上次回に持寄らるゝこととした。原稿用紙は見本によつて種々協議の結果別紙の通りとなつたのである。（別紙は既に會員諸君へ送付してあるから茲には省略する）

次に記念講演會に就て那波委員長より「唯今決定しました各部門によつて大體御講演を願ふこととなると思ふ。従來は講演には所長とか課長とか言ふ様な代表的の人が表に立つて實際仕事をしてその衝に當つた人は兎角陰にかくれ勝ちでありましたからこの度は一つ實際仕事をした方々に多數講演を願ふことにし度いと思ひます。これは學術の振興、延いては本會の隆昌に對して誠に望ましい事と思ひます。就ては講演數、講演者等の御決定を願ひ度い。」との意を述べられ種々協議の結果講演數は別項の通りとし講演者は本人の意志を聞く必要があるから直ちに決定することは不可能であるとの事で次回迄に各主査に於て選定することになつた。

以上の様な協議の結果學會としてはアブストラクトの見本を作製すること、原稿用紙を作製すること及び各主査に委員長より公式依頼状を出すこと等が決定せられた。これに引續いて土木學會として種々の問題に就て座談會を催すならば得る所多大であらう等の意見もあつた。

## 第 1 回 見 學 會 記 事

期 日 昭和 9 年 3 月 24 日

見學場所 明治製菓株式會社 (川崎工場)

東京製鋼株式會社 "

東京電氣株式會社 "

今年より本學會は東京附近に於ける各種工場見學會を會員多數の希望で開催する事と成つた。新緑萌ゆる陽春の快適の候を期し去る 3 月 24 日 (土) この記念すべき第 1 回見學會が川崎に於て舉行せられ参加者は 116 名に達し仲々盛會であつた。次に見學會の大體の模様を記録すれば次の通りである。

**明治製菓** 参加會員は午後 1 時半迄に三々五々川崎の明治製菓工場に參集し當會事務所の受付で見學會員徽章の交付を受け一行は工場 4 階の大休憩室で同社の製品に係る菓子の饗應を受け乍ら同社技師長から製菓の歴史、英、米、獨、佛諸國に於ける乾菓子の狀況並に近年異常の發展を遂げて來た我國の製菓技術の紹介あり殊にチョコレート製品に對する技術の進歩せる自慢談を混へた歡迎の御挨拶に接した。これに對し米元副會長は我々の家庭の必需品である菓子の製菓作業狀況を今度會社の御厚志により實地に見學させて頂く事の出來た事は非常に欣快の至りである。次に本來ならば見學後に於て御禮を申述べるのであるが今度は次の見學の都合もあるので一行の集合のこの席で見學に先立ち厚く御禮を申述べるとの意味の謝辭ありたる後一行は數班に分れ次の順序で見學した。先づ 4 階のカルミン類、ウェーブアー類、チョコレート類、ドロップス類、3 階のコ、ア類チョコレート類、2 階のキャラメル類、チョコレート類並に第 2 號館の 4 階より 2 階に至るビスケット類及び 1 階の各種製品の倉庫並に發送設備等を親しく見學した。

見學中特に目を引いた事共を列擧すれば職工 (男工 350 名、女工 650 名) は殆んど全部が青年にして且つ健康體であつて中にはモダン・ボーイ、或はモダン・ガールが散見されこれ等の人々の手を煩はした菓子は非常に安心出来る様な氣がした。製菓作業は總べて 100% に機械化され而して大量的に而も等質的に製出される仕組となつて居た。而して職工は主として各種機械の監視程度なるも製品の箱詰め作業や或製菓機の部では女工の仕事量の關係で人の手を利用して居る部分もあつた。殊にドロップスの製品の内の紙包部で女工の規則正しいピッチで動く一握のドロップスは正確に一包の容量に一致し而も折目正しくこれを包める様に迄熟練の極に達して居たのには一驚した。又チョコレート特有の香氣を失はせない様に非常に臭覺の勝れた職工が居て時々刻々の原料カ、オ豆の焙炒の程度を焙炒機の傍で檢出して居た。この作業は何時頃になつたら機械化される事だらう。次に各製菓室内は四季を通じて温度は攝氏 15 度、湿度は 60% に保たれて居り且つ室内は塵埃立たずに清淨に保たれてあつた事等總べて科學的に處理されて所謂近代文明の粹を包容して居る工場、見るからに輕快な白亜の鐵筋コンクリート造りは菓子製造工場として最も相應しいものである。

我々がペンを握つて單に事務を採る場合の様に只與へられた仕事を職工達は行つて居るのでこんな謀反は起さないだらうが筆者は作業狀況見學に伴ひ製出される種々の菓子の持つ特有の風味に接しつゝ原料から製品に至るまでの各種過程にあるサンプルを少量づゝ貰つて歸へりたかつた。

菓子は自身の持つ味ひと共に之れに相應しい美麗な種々の表裝に依りて愛用される範圍が大きくなり小くもなるものゝ様に思はれた。

明治製菓工場見學後豫め抽籤に依り定められた通り東京電氣組と東京製鋼組との 2 班に別れ夫々の工場へと足

を運んだのである。

**東京製鋼** 明治製菓工場の裏口から六郷川堤防に沿ひ徒歩約 10 分にして工場の真中に東京製鋼株式会社と高い鐵製の煙突に白ペンキでその存在を示してゐるのが見へた。而して一行は工場内に特別に設けられた休憩所で茶菓の御馳走に預り、工場長より歓迎の辭ありて後鋼ロープ部主任及びマニラ・ロープ部主任等より夫々の部門に於ける概括的の御話を承はつた。草間副會長は一行を代表してロープ製品は船舶、漁業、鑛山方面に用途は實に廣いのであるが土木工事方面に於ても廣く使用せられ殊に御社の專賣特許のシノサイ式（發明者シノヅカ、サトウ、イツカ 3 氏の頭字を採りたりとの由）ロープは既に定評あり、これは今後益々發達の途にある無線電信鐵塔用には最も相應しいものであると考へる。而して之等の製品の製作の過程を親しく見學させて頂く機會を與へられた會社の御厚意に對し茲に一行を代表して厚く御禮を申上げる意味の謝辭を述べられた。而して一行は 2 班に別れ先づ鋼ロープ部工場、マニラ・ロープ部工場最後に材料試驗設備室の順序で見學した。

工場の外觀は實に死んだ様な實に活氣のない工場様に見受けられたが工場内部は中々どうしてマニラ及び鋼ロープ製作に關する近代科學の粹を集めた諸機械が恰も時計のセコンドの絶へまいと同じ様に非常な速度で休みなく活動を續けて居たのには一驚した。當工場は鋼ロープ類の材料は八幡製鐵所の針金製品にして、マニラ・ロープ類の原料は臺灣に産するサイザル麻を使用して居るのである。

當工場の主なる製品を列擧して見ると次の通りである。

不反撥性鋼索（シノサイ式鋼索）、フラットド・ストランド・ロープ、刃入鋼索、ワイヤ入漁業用麻綱、ワイヤ入延繩、防腐マニラ綱等である。

次にシノサイ式ロープの利益の點を記すと

1. 端をしばらずに切り放しても子繩及び素線が解かれる事がないから普通の鋼索の場合の様に撚りを戻す處なし。
2. 操作中キングの折目を生ずる處なし。
3. 普通の鋼索に比し柔軟性大である。
4. 使用中斷線が出来ても外方へ跳ね出さず子繩に密接し原形を保つから隣りの素線を損じたり、滑車其他附屬具に引掛ることなく又取扱者に傷害を與へる危険がない。
5. 疲勞試験の結果は普通鋼索に比し 2 倍乃至數倍の耐久力がある。
6. 普通の鋼索では其素線及び子繩が當然有する彈性により反撥力を有し常に解れやうとする傾向が強く、使用せぬ時でも可成の内應力が働いてゐるがシノサイ式ロープは其素線及び子繩に反撥力がないから荷重の掛らぬ時にも内應力を持たぬから一旦荷重が掛ると素線の負擔力の全部を擧げて荷重の方にのみ利用出来る。

**東京電氣** 明菓工場の見學を終へて、チョコレート、キャラメル、ドロブスさては數々の乾菓子の甘い、馥郁たる香りを滿喫し、驚くばかりに巧妙なる機械設備と見事な女工さん達の熟練した手付とに感心した一行は此處で 2 組に分れて、一は東京電氣を、一は東京製鋼を見學すべく右と左に分れることゝなつた。筆者は恰も東京電氣見學班に隨行することになつてゐたので以下同會社見學の概要を紹介しよう。

陽春の日は惜しげもなくその光輝を投げ與へて見學旅行には申分ない日であつたが唯惜しむらくは風稍強く尙腐寒きを感じしめた。工場の内外共に設備至らざるはなく、建物の配置、構内道路の舗裝等に至るまで遺憾なく近代文化を取入れたる明菓の完備を感じつゝ門を出ればすぐ南に接して是れ又工場に事務所を整然たる構へをなす會社がある。一角に屹立する大煙突にはマツドランプの 6 字、將に見學せんとする東京電氣だ。事務所の支關を

入り右折し階段を上れば會社附屬の照明學校に至る。此處にて見學班は更に2組に分れ各1名宛の指導説明者に引率されて夫々見學を初むることになった。筆者の同行せる組はうら若き婦人を案内者とする一班にして先づ講義室に入り電燈照明の概括的説明を聞く。初めてカーボン・フィラメントの電燈が紹介された時、今迄うす暗い不便なランプに甘んじてゐた人々は全く天與の光を仰いだ様に感謝を以て迎へたことであらうが、其の後日進歩なる科學文明の恩澤にあづかつて電燈照明も驚くべき發達をなし來つた。W字形の鈍い赤い光を放つカーボン電球より、光も眩ゆいタングステン電球へ更にガス入れランプへと電球フィラメントの温度は益々上り、その光輝は愈々増加すると今度は光り眩ゆいことが非難的となり眩惑性を除いた半透明、艶消し、乳色電球等が紹介され、一方電燈光に自然の太陽光線と同様の色と性質とを與へんとする研究もなされ既に電燈光より赤色、黄色光線を除いた晝光電球、人工太陽燈等が生れその發達の眩しさは全く電燈のそれ以上である。だが自然はまだまだ人智のよく及ぶを許さず、色彩の識別に關しては電燈光は全然日光には及ばないのである。然も電球の種類（透明、艶消し、半透明、乳色電球等）によつて色彩の感じの變化するは寧ろ奇異とする程であつて殊に紫色に於て一層この性質は顯著に現はれる。藤紫の半襟も電球に依つて或は赤色に見えたり又は青味がかつて見える。成程之れでは夜間の買物が晝間になつてとんでもない色彩だつたりする悲喜劇が起るわけである。色彩ばかりではない立體の感じも光線の射入する方向によつてその効果が全く一變することには全く驚くばかりであつた。石膏造りの顔面に上下左右より交互に光線をあてると或は笑ふが如く、泣くが如く怒るが如く又は澁るが如き容貌となり恰も生ける顔の如き種々の表情を呈する。是には流石専門知識を誇る參加會員諸氏も少なからず感心せられた様であつた。かくして電燈は明るく明るくと進歩し改良されて來たが最近では眩惑性と無影とが問題となつて來た。明るく感じよくとは、殊に室内照明からの要求である。この要求に應ずべく生れたものに電球の方からは前記の半透明、艶消し乳色電球等であるが更にグローブに依つて光輝を加減せる半間接照明及び光源を蔽ひて反射光線に依る所謂間接照明がある。勿論光度よりすれば半間接照明は直接照明に劣り間接照明は最も不經濟であるが感覺的には之れが最も勝れてゐる爲、最新照明設備には間接照明の用ひられることが少くない様である。電燈照明の發達とその効果に就き如上の説明を聽きたる後次の舞臺照明室に移る。近時の劇、映畫等は昔の小屋時代とは比較にならぬ進歩を示して演劇の技術、トリック等の中には寧ろその事實を疑ふばかりのものが少くないがこれが照明の力を借りて更に一層効果的になれる場合が屢々ある。夜明け日暮れの感じ、晴れた空模様や雲の動き、さては池水の小さき波紋から大海の波のうねりに至るまで實感をそのまま浮び出す巧妙なる光の使ひ分けだ。更に近時の歌劇、レビューになくはならぬ赤青紫の強烈なる色彩、五彩の光を滿身に浴びて舞臺映しと踊るレビューガールの藝術を一層効果あらしむる頭光脚光が矢張り電燈光の應用だ。赤青の電燈の光も全く馬鹿にはならぬとつくづく感ずるの外はない。此處には又光電管を應用した電燈明滅器が面白い。夕闇迫り薄暮となれば光電管の作用によりてスイッチが入り電燈がともしり又日光射す朝ともなれば自然にスイッチ外れて燈火は消える。然も巧妙なるはスイッチを入れ外しする光電管は月あかり、燈火等に依る明るさでは作用せず自然の光に依つてのみ作用する様に加減せられてある事である。併しこの加減により電燈光にても感ず様にせば電燈點滅器ともなし得る譯だから便利なものだ。次室に入れば電氣應用の種々の小器具がある。外科病院での手術にはなくてはならぬ無影燈、交流電源のサイクルに依つて動く電氣時計、而も少し位の周波數の變化に對しては影響されぬ装置も整つてゐる。併し停電すれば止るだらうと云へば自動的に數時間は保つスプリングの装置を有するものもあるさうだ。但しサイクルが變ればこれは全然駄目だ従つて東京の電氣時計は大阪邊では使へぬわけ。東京用と大阪用とあるから贈り物等には御注意が肝心との事。面白いのは紫外線應用の模造品鑑定である。ベツコウ、ダイヤモンド、ルビー、絹絲等の偽物、模

造品、人造品を検出する等は極めて容易である。ベツコウ製のものとセルロイド製の品、ダイヤモンド又はルビーと硝子製のイミテーション、天然絹糸と人造絹糸の品物に紫外線をあてると天然物は燦然たる光輝を放つに反し模造品は光輝を示さない。何人と雖も一見にして確實に眞偽の識別をなし得るから便利なものだ。かくして陳列室を出て屋外照明室に入る。此處では街路照明即ち街燈が専門上躰からず興味を引いた。街路道路の照明設備は勿論街の繁榮の程度建物の状態等に依つてその明るさ燈器の形等を決すべきであるが一般には大きな電燈を間隔廣く用ふることが得策で往々散見する如き小電燈を徒らに多數而も間隔狭く並べる事は外觀悪しきのみならず維持費も嵩高となり當を得たものではないとの事。工場照明室に入ればカーボン・フィラメントの透明電球に金屬製の笠を用ひたる舊式照明とタングステンの乳色電球に反射笠を用ひたる近代的照明とでは同一電力にて約二倍半の明るさの差異あるを實驗し、電球の大きさ、間隔等による作業能率の可否、之に要する設備費維持等の關係の説明を聴き更に周囲の壁色が如何に室の明るさに影響するかを實驗し工場等の設計に際して電燈照明は作業能率上極めて關係深くして輕視し能はざるものなることを痛感するに至つた。此處を出て次はラヂオ室を見る。赤青の色もまばゆいネオンサインが目立つ。近代都市の夜間を飾るになくてはならぬ代ものだ。通常ネオンサインと總稱せられてゐるがネオン瓦斯は赤色にのみ封入せられ青色は水銀の瓦斯白色はヘリウム瓦斯を用ふるさうだ。更に硝子に着色を施して、各所に散見する如き美麗なる色とりどりの光を作るのだ。此處には又ラヂオの唸りを應用した音楽器があり、説明者がその身振りに依つて抑揚、リズム、共に整つた簡単な音楽を奏したのは頗る珍しく感じた。ホールに近く赤外線應用の電鈴装置がある。即ち距離をへだてて赤外線を電鈴に向つて放射し置き之れを遮断すれば電鈴が鳴る如く装置を施せるものである。勿論電源の大小によつて距離の大きさは定まるのであるが現今にては東京灣の入口、三浦半島と房總半島とに此の施設を装置しをけば東京灣口を出入する汽船を検する事も出来るとの事である。近代科學兵器の1として軍部に於て研究せられ居る由。ホールの奥には家庭照明の種々なる設備があり此處では建築化照明なるものが可成り興味を引いた。之れは従來の如く電燈を天井より吊下げるとか又は露出することなく建築物そのもの一部分に照明装置を含めてしまふもので天井全體が照明装置であるとか壁間の一部に照明装置が施してあるとかいふ様に間接照明を巧妙に扱つたものである。以上を以て照明學校の見學を終りたるを以て他の一組と合流し次は電球の製造工場の見學をなすべく工場へと進む。洗石に東洋一を誇るマツダランプ、工場建築と雖も鐵筋コンクリート造りの立派なものだ。さて電球製造工場に入れば先の照明學校とは全く變つてベルトは廻り、コンベイヤーは走り大きな機械は轟々の音を立てて廻轉し奥には何か熔鑪爐狀の籠に紅の焰が燃え盛つてゐる。電球硝子の爐だ。この燃え立つ爐の中より鋼鐵の腕に依つて掴み出された焰の塊は之れを受けると廻轉機に渡され、それが廻轉する間に紅き焰の塊より漸く電球の形を想像される硝子の袋に膨らませられてコンベイヤーに送られる。電球狀になつた硝子は更に燒きを入れるための爐の中をコンベイヤーに依つて通過し検査所に至る。検査所には數人の検査職工ありて電球の歪、硝子の均等性其他細密なる検査を施し之に合格せるものはそのまま箱に收め、不合格品は直ちに破壊して再び爐中に投入する。而してその難調をパスする物極めて少く半以上は破壊されて再び出直さねばならぬ様は入學難、就職難を喩つ人生の行路難そのまゝを示す如く眞に皮肉な感がした。此處でも先の明業工場に於けると同様、巧妙なる機械設備と熟練なる職工と相俟つて作業を連続的に行ひ少しの手戻りも手空きもなく100%の能率を以て機械と人との區別なく一體となつて動いてゐる様は全く感心するの外はなかつた。電球工場内を一巡して屋外に出づれば正しく午後5時。運轉休止のサイレンは空高く鳴響き今迄一瞬の休なく立振舞つてゐた男女工連は其處此處に一團となつて歸宅の準備をなし初めてゐた。電球王國マツダランプまだまだ吾人の參考たるべき種々の施設はあることであらうが既に工場閉鎖の時も

至つたので遺憾ながら東京電氣の見學は之れにて終ることゝなし、かくして川崎の2大會社の見學を終りたる會員諸氏は數時間の見學に思ひ出を残しつつ三々五々打連れて歸路についたのである。

今回の視察は多數の會員諸氏の參加に依つて極めて盛大裡に行はれ而も極めて有益なるものを多々見聞し得た事を筆者は確信するものであるが如上の見學記を以てしては筆者の遲筆、よく見學の要點を紹介し得ざるを憂ふるものである。會員諸氏よ。今後本會の見學企畫には振つて參加せられ、吾々の専門知識は云ふに及ばず一般科學常識の獲得に大に利用されん事を望む次第である。